

鴻 koh

月刊俳句誌

令和3年8月1日発行

(毎月1回1日発行)

第16巻第8号 通巻182号

8 月号

2021



園

斑猫と道連れとなる遠江

しばし佇み麦秋の風を聞く

一切の音を持たざる蟻地獄

葭雀静かに沼の横たはる

桑の実を摘む慎ましき里山に

風鈴のうつらうつらと鳴る真昼

花罌粟の野は夕風を生むところ

石抛りたし夕焼の沖あれば

一途なるものありけり宵螢

隠り沼の筒鳥のこゑ耳底に

大瑠璃小瑠璃瀬音さびしき辺りにも

野へゆかむ父の日の空青ければ

通し鴨囁き合うてゐることし

# うつらうつらと

主宰作品

増成栗人

# 詩 作品抄

八十八夜仏壇に燭入れてより 伊藤真代

露座仏に雨篁に夏の雨 守屋久江

芍薬や仏は海を渡り来し 森 祐司

おぼろ夜のぼおんぼおんと古時計 五十嵐敏子

卯の花腐し折紙の展開図 野村昌代

長谷観音百の牡丹の息遣ひ 中西富士子

しづけさといふ涼しさの竹林 足立枝里

庭先に藤椅子を出しアペリティフ 北城美佐

桐咲くや納戸の奥の箱枕 美濃律子

葉桜やひつそりとミサ始まりぬ 石垣真理子

会津まほろば植田となりて耀へり 田部富仁子

薔薇真紅暮らしに恙なかりけり 村手雅子

母の日と大きな籠の花が着く 佐藤あさ子

ぼうたんの生絹のごとき夕べかな 相川 健

仏生会蘆原へ潮上りくる 山崎正子

いちめんの代田月夜となりにけり 待場陶火

傘たたみ樟の青葉の蔭にゐる 藤原明美

桜葉降る夜なり耳澄ましけり 山岸明子

ひねもすの読書卯の花腐しかな 中内敏夫

登山口発終バスは十六時 小林和子

増成栗人 選

「雷」とは空中で上昇気流が発生し、雲の上方と下方で放電が起きる現象をいう。一瞬のエネルギー放出が見せる光が稲妻、音が雷鳴である。上昇気流によって積乱雲の発生する晩夏や初秋に多いが、歳時記では「雷」はその豪快な音に涼味を感じたことから夏、「稲妻」は文字通り稲に実りをもたらすと考えられたことから、秋に分類されている。

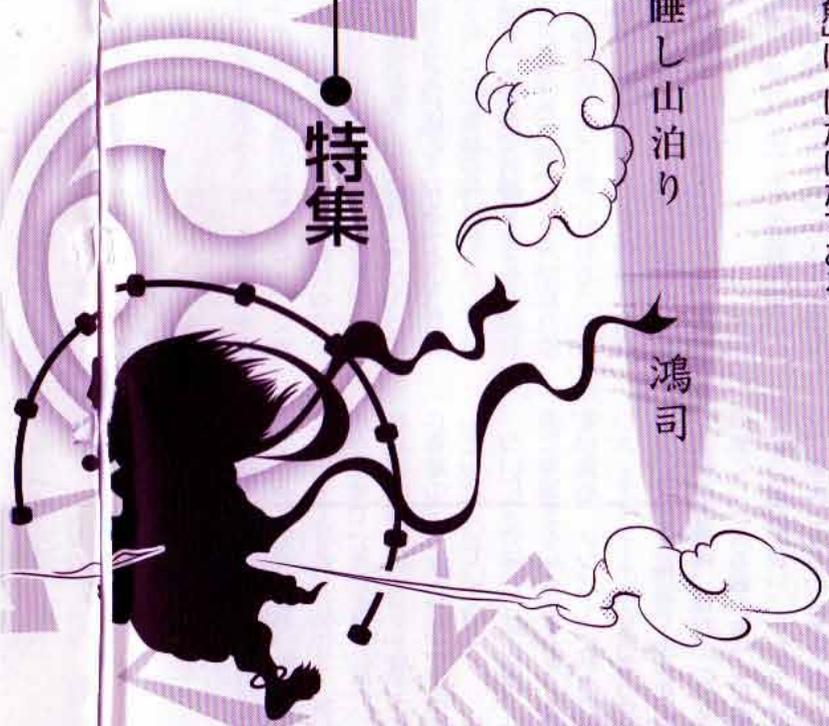
「風神雷神図」は国宝の屏風絵、「雷魚」は、はたはたである。

雷過ぎて素足の睡し山泊り

鴻司

# 雷

## 特集



### 俳句に詠まれた雷

石垣真理子

七十二候をひもつけば春分の頃に「雷乃発声かみなりすなわちこえをはつす」とあり、秋分の頃には「雷乃収声かみなりすなわちこえをおさむ」とあります。季節の移り変わりが伝わってきます。

歳時記の「雷」には「はたした神」「いかづち」「雷鳴」「遠雷」「神鳴」など多くの傍題がのっています。雷は雲によって自然に起きる放電現象で光や音を伴います。「迅雷」は特に激しいもの、「日雷」は晴れている時になり雨は伴いません。

- 迅雷に一瞬木々の真青なり 長谷川かな女
- 迅雷の落としてゆきし襲ひとつ 田中一光
- 生駒山鳴れるごとくに日雷 茨木和生
- はた、神七浦かけて響みけり 日野草城
- いかづちをやり過ごしたる参籠所 赤峰ひろし
- 落雷の一部始終のながきこと 宇多喜代子
- 遠雷やはづしてひかる耳かざり 木下夕爾

雷は夏に発生することが多く夏の季語になっています。しかし前線の通過に伴って起きる現象なので一年中起こります。

- 下町は雨になりけり春の雷 正岡子規
- 虫出しや動き出したる腕時計 関ただお

- 秋の雷個性鋭き絵を貰ふ 竹原とき江
- 秋の雷サドイッチが倒れけり 田中一光
- 冬の雷家の暗きに鳴り籠る 山口誓子
- 寒雷やびりりびりと真夜の玻璃 加藤楸邨
- 寒雷やひじきをまぜる鍋の中 横山房子
- 少年のまだ起きてゐる雪おこし 齊藤美規
- 一湾の気色立ちをり鯰起し 宮下翠舟
- 鯰起しは十二月、一月の鯰漁の頃に鳴る雷で、豊漁の前兆とされています。新潟出身の先輩が好んで用いていた季語です。
- 二度三度越の浜辺の鯰起し 藤原翔
- 海沿ひに近づいて来る鯰起し 藤原翔

自然災害はこわいです。山で雷雨にあえば生きた心地はしないでしょう。ピッケルや時計の鎖、ベルトの留め金などの金物は全て危険です。身から遠ざけることが必須です。

- 雷にはふ岩群硬き顔を出す 高須 茂
- 雷に髪立ちしと小屋へ入り来し 小林わたる
- 嶺に立つ雷火偃松を白くせり 岡田貞峰

宮城県を舞台にした連続ドラマ「おかえりモネ」が放送中です。山での雷雨のシーンの他にも虹、雲など気象の話題がふんだんにあり、俳人としても楽しめそうです。

伊藤啓泉さんが第一句集『舟唄』を上梓しようと思  
い立ったのは、「昨年の秋に妻が亡くなったのを機に  
これまでのものを句集にしようと思った。」と本句集  
の「あとがき」に述べている。

啓泉さんは地元山形の結社「胡桃」の同人会長を長  
年務めている。本句集に収録された句の大部分は結社  
誌「胡桃」に投句されたものであるという。

筆者は本句集を読む前に啓泉さんの居住地、「山形  
県大江町」という地域がどんな所なのかに興味を持っ  
た。地図を広げてみると「大江町」は県のほぼ中央に  
位置し、「最上川」が町域を流れ、また北西に出羽三  
山の最高峰「月山」を望む大自然の懐に抱かれた地域  
であることが分かった。大江町は昭和三十四年左沢(あ  
てらざわ)町と漆川村が合併して生まれた町で、元禄  
年間より大正初期頃まで最上川舟運の中継地として栄  
えた町でもあった。

従って本句集に詠われた地域の大部分は、豊かな自  
然を句材にしたものが圧倒的に多いのである。とりわ  
け、「最上川」と「月山」の二つの景勝地が数多く詠  
まれているのが特徴的である。まず「最上川」を詠ん  
だものを取り上げてみよう。

月の暈うかべてあたり春の川  
アカシアの花の膨らむ最上川

飾る」と見立て、五句目の「木立の幹に雪の貌」をひっ  
そりと見ている作者がおり、最上川の句同様、作者  
の生活の中に常に月山が、存在していることが分か  
るのである。

また、啓泉さんは俳句に親しむ前は短歌に強い関  
心があったという。上山市出身の近代短歌を代表す  
る斎藤茂吉の存在が大きかったからである。

鰻屋の座敷に妻と茂吉の忌  
蔵王嶺を畏みてをり茂吉の忌  
夕凍みの雲湧き出づる茂吉歌碑  
亀鳴いて耳敬てる茂吉像

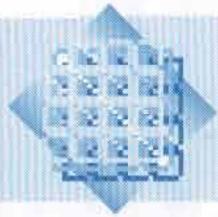
茂吉忌は二月二十五日、寒い時期に妻と食べた鰻、  
雪の蔵王嶺の神々しさと郷里の偉大な歌人への畏む  
気持ちを持つ作者がいる。

降る雪に湯の沸く音とあたりけり  
春光の皴の眩しき佳き日かな  
白鳥の来て美しき出羽の国  
緑蔭に己と対峙してゐたり  
山の神下りて田の神雪解風  
水音の揺るる影あり尊舟  
慟哭のごとき出羽の雪解水

最上川、月山以外にも啓泉さんは地域の自然に入  
り込み、句材を見出し、その自然を愛おしみ、讃え

## 伊藤啓泉句集『舟唄』鑑賞 産土讃歌

● 佐久間敏高



たまゆらの秋日を惜しむ最上川  
木の実降る雨かと思ふ最上川  
おだやかに鴨が漕引く最上川  
去年今年出羽を貫く最上川  
かはたれにかはほりの舞ふ最上川  
早星川底見せる最上川

悠久の大河最上川は「月の暈」を浮かべたり、岸辺  
に「アカシア」が膨らむように咲いていた、「鴨が漕  
」を引いたり、また夏季には「川底を」みせたりと、四  
季折々の表情の機微が詠われ、地域を熟知している者  
のみが紡ぎだすことができる境地の句であることが分  
かる。次に「月山」の句を見てみよう。

月山の日を照り返す蕎麦の花  
月山の裾まくりあげ山笑ふ  
月山の秋を着飾る七合目  
地虫出て月山の雲動かざり  
月山の木立の幹に雪の貌  
月山を少しずらして冬構  
月山を引き立ててゐる桃の花  
月山の風に真つ赤な木守柿  
一句目、白い「蕎麦の花」と月山の取り合わせ、二  
句目、芽吹き季節を迎えた月山を「裾まくり上げ」  
と比喩したことや三句目、山に映える紅葉を「秋を着

るように詠んでいる。六句目の「尊舟(ぬなわぶね)」  
は蓴菜を採るための小さな箱型の舟、七句目は雪国  
山形の積雪量がいかに多いかを物語っている。

夏至の日の妻の肌着を洗ひをり  
妻がゐて竹の若葉の葉擦れ音  
穀象や一日二合の出羽暮し  
大手術終え美しき冬銀河  
燕来て二人に余る南瓜煮る  
床にゐて妻が呼ぶ声冬隣

啓泉さんの奥さんは、八年ほど前から体調を崩し  
介護が必要となったようである。掲句はその療養生  
活の中から生まれたものである。大変な生活であつ  
たらうが暗さがないのが救いである。

亡き妻と三晩を過ごし九月尽  
亡骸は棺の花野に埋れけり  
妻なしの夜長の闇の重きかな

奥さんは昨年の九月永眠された。この三句は本句  
集に収録されていないが、本年一月号の「鴻」誌に  
投句されたものである。心からお悔み申し上げると  
ともに、啓泉さんが本句集『舟唄』の上梓を契機と  
して、更なる高みへ発展されることを願って止まな  
い。

荒川心星



## バードウィーク

バードウィーク棚田一枚づつ晴れて  
いつせいの囀りの音が森の音  
山里の尼寺で賜<sup>た</sup>ぶ草の餅  
苗代へ朝の日向の移りけり  
花桃の里の月夜となりにけり  
揚雲雀知多の岬の歌となる  
神籬の森に雀と黒揚羽  
いよよ濃くなる葉桜の蔭の中

青梅を拾ふいつかも水匂ひ  
河骨や高き瀬音のひもすがら  
鯉の水脈浅沙の花に及びけり  
たなびくは池の向うの花檣  
白靴を取り出す木々の膨らめば  
夏めくや犬が転がる草の上  
ひややかに十葉の花の純白  
更衣ふいに鳥翔つ羽音かな

青梅



半谷洋子

谷口摩耶



夏至

アマリリス小暗き庭を照らしけり  
 羽のあるものを休ませ木下闇  
 みどりさす階本を返しけり  
 紫陽花を手鞠のやうに弾ませて  
 二人暮らし長しほのかに未央柳  
 露を剥く指先黒く滲ませて  
 夏至の日の酔の物にまづ箸をつけ  
 サックスの音にまどろむ夏の夜

# ちよつとそごまで

第27回



## 「築地・イギリス巻と佃んべえ」 鈴木 崇

錦木清方に「築地明石町」という絵画作品がある。長年にわたり所在不明だった、幻の名作。二〇一九年、四十四年ぶりに国立近代美術館で一般公開された。私は会期中に見ることはできなかったが、鎌倉の錦木清方記念美術館で下絵を見た。

明治後期に流行した「イギリス巻」と呼ばれる髪型をした女性が旧外国人居留地の明石町に佇む姿を描いている。女性はすつきりとした立ち姿で、肩越から佃島の入り江に停泊する帆船が見える。清方絵画の特徴である「古き良き明治」への追憶にあふれた作品である。

描かれた場所は現在の中央区明石町、聖路加国際病院が一角の多くを占めるエリアだ。明治七年に創設されたカトリック築地教会は今でも当時の面影を残している。

清方は築地で育ち木挽町に長く住んだ、代表的な「銀座っ子」である。「明石町の外国人居留地と、当時唯一のモダン街銀座とに挟まれた、築地と木挽町とは常に何もか清新な気流が感ぜられるような気も

ちがした。」とエッセイに書いている。対岸の佃島へは佃大橋で簡単にアクセスできるが、かつては隅田川で最後まで残った「佃の渡し」が唯一の交通手段であった。

### 佃島に佃煮を買ふ花ぐもり

鈴木真砂女

佃大橋を渡った川沿いの通りに佃煮屋が三店集まっている。それぞれに創業当時の味の味を変わらずに伝える老舗である。真砂女はどこの店を買ったのだろう。取材時、私は三店のうちの「天安」で佃煮を買って帰った。

佃堀には佃小橋が架かっている。朱色の欄干と船溜まりの向こうに高層マンションが林立する絶景スポットである。堀にはハゼ釣りを楽しむ釣り糸が垂れてのどかな時間流れている。

「戦後最大の思想家」とも呼ばれる吉本隆明は、佃島で育った「船大工の息子」だった。この地域特有のペーゴマ「佃んべえ」

で遊び明かした少年時代、高学歴になると私塾へ通うこととなり、「子どもの王国」からは抜け出すことになった。

「わたしが良きひとびとの良き世界と別れるときの、名状し難い寂しさや切なさの感じをはじめ味わったのはこの時だった。これは原体験の原感情というべきものとなって現在もわたしを規定している。」

吉本の思想の原型は佃煮の匂いのする露地で育まれたのだ。地に足のついた匂いも手触りもある生活実感を吉本は「大衆の原像」と呼んだ。平凡の非凡さへの評価は、吉本のなかで一貫している。



佃島・佃堀



<http://www.haisi.com/koh/index.htm>



# 羽音集

増成栗人 選



卯の花腐し折紙の展開図  
 からつぼの帽子の函轟晶子の忌  
 夏来る聖火リレーの車椅子  
 木香薔薇図書館前の喫茶店  
 まんぼうが手を振つて子に夏が来る  
 母の日や宅急便の届く音  
 髪染めて若葉の風と思ひけり  
 薔薇真紅暮らしに恙なかりけり  
 夏兆すシーツの糊の肌触り  
 籠り居の暮らしに慣れて冷し酒  
 海胆割りてしづしづ入れる銀の匙  
 カーテンを洗ふ日と決め夏初め  
 レース編む柱時計の鳴る部屋で  
 庭先に藤椅子を出しアペリティフ  
 空瓶に挿す鈴蘭の似合ふ部屋  
 寺を出て柴又に夏来たりけり  
 桜前線追ひかけて行く陸奥へ  
 きふけふ芍薬の芽のふつくらと  
 水の面を奪はむほどの花笈  
 ひねもすの読書卯の花腐しかな

習志野 野村昌代

豊川 村手雅子

札幌 北城美佐

流山 中内敏夫